

編集後記

正月休みにのんびり編集後記を書こうと算段していたところ、2024年は元日早々、惨事が続き、昇龍の年どころか、波乱の幕開けとなりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り致します。

2023年は新型コロナウイルス感染症の猛威で明けましたが、5月には5類に移行され、ゆるりとポストコロナに舵を切った1年かと思います。

一方、スポーツ面では野球がホットな話題を集め、WBC優勝に始まって阪神のAREからの日本一、大谷の超ド級の移籍がありました。サッカーではヴィッセルのJ1初制覇と神戸にとってはめでたい一年でした。

さて、令和5年度の第62巻神戸市立病院紀要は、アイセンターの栗本康夫院長による「原発閉塞隅角病」の総説、西市民杉原陽子看護師による「ケースレポートからみえるA病院の看護の特徴」の原著、中央市民腎臓内科高田風医師による「当院における終末期医療としての腹膜透析」の実践報告を掲載しており、新型コロナに関するものはなく、紀要の方もポストコロ

ナに舵を切った感がします。

栗本院長の総説は中途失明原因の第一位である緑内障について解説されたもので、失明を防ぐ上で医療者として認識しておくべきことを痛感した内容です。杉原看護師・高田医師の論文は高齢、認知症、終末期などの様々な理由から必ずしも教科書的な医療を行えない状況でも患者さんにとって最善の医療を施すにはいかに考えるべきかを教えてくれる内容です。

紀要に掲載される論文は必ずしも自分の専門分野と離れた内容となり、敬遠される方もいるかもしれません。しかし、自分の領域を離れたところからの視点は何かのヒントになってブレイクスルーに繋がる可能性もあり、是非、ご一読ください。

最後に今年度は投稿が少なかったのですが、次年度は医師をはじめ、多くの職種からの投稿をお待ちしております。

神戸市立医療センター中央市民病院
副院長兼呼吸器外科部長 高橋 豊